

# TOEIC 信仰の落とし穴

横山 孝一

## 1. はじめに

TOEICテストがわが国の英語教育に及ぼした影響は計り知れない。大学の教科書はここ10年で、英米文学系の読み物が大幅に減少し、TOEIC対応の教科書が主流になっている。文部科学省検定済教科書においても、メールや広告などTOEICのReading問題を意識した教材を載せる会社が出てきた。センター試験にリスニング問題が導入されたのもTOEICと無関係ではあるまい。日常話されている英語から正しく情報を聴きとるリスニング力と、英文から必要な情報を読みとる速読力を測る上で、たしかにTOEICテストは役に立つ。わが国の産業界がこぞってTOEICを採用したのはうなずける。しかし、それがTOEIC信仰、さらに進んで盲信となってしまうと、害にしかならない。

## 2. TOEICの影響力

企業がTOEICテストのスコアを要求するようになってから、大学はもちろん、予備校や、いわゆる「進学校」と呼ばれる高校でも、TOEICが大きな影響をもつようになった。とりわけ、国立工業高等専門学校(通称、高専)は、世界で活躍する技術者を養成する必要から、TOEICをことのほか重視している。なかには検定済教科書の使用をやめて、大学で使うTOEIC対応の教科書を1年生から使用している高専もあるほどだ。たとえば、3年生全員に受験を義務づけるなど、ある意味高校の英語コースや進学校以上に徹底している。理系の人間に多く見られる、数字への信頼が後押しして、最低400点、できれば「日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる」470点以上を入学7年後の専攻科修了までには全員にとらせたい、と意気込んでいる。

大学院や産業界がTOEICのスコアを求める以上、当然、こうした目標を達成させるような授業を考え

なければならない。しかし、470点を超えさせればそれでいいのか。点数への過度のこだわりはすべて、英語教育現場やTOEICテストの実態を知らない人たちの安易なTOEIC信仰から起こっている。

## 3. TOEICテストの実態

TOEICの点数は、あくまでも英語力を測る1つの目安である。得点が英語力を絶対的に保証するわけではない。ところが点数ばかりが1人歩きし、このところを勘違いしている人が多いのには驚かされる。幸いTOEICを採用している企業自体がこの誤解に気づきだした。ビジネスの現場で「テストでは測ることのできない壁」を知ったボーダフォンの人材開発部長の島上英治氏は、「TOEICスコア700点、800点以上の社員でも、海外での会議に参加させますと、ディスカッションになかなか入っていけない」(『TOEIC Newsletter』No.88)と指摘している。「どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている」レベルBであるのに、だ。

だが、ペーパー試験でしゃべる力を測れると信じるのがそもそものまちがいのだ。伊藤忠商事では、海外出張する社員にはTOEICテストのほかに「独自の会話テスト」を行っているという。「ビジネスの場では、すばやく受け答えができる瞬発力が求められます。いくら英語の知識を持っていても、実際に戦略的に使いこなせる力がなければそれを利益に結びつけることはできません」と研修事業部長の片桐二郎氏は断言している(『TOEIC Newsletter』No.83)。

要するに、TOEICテストでは会話能力は測れないということだ。ひと昔前なら、英語を専攻する大学生や海外勤務の会社員ばかりが受ける試験だったので、ある程度整合性はあったのだろうが、いままではだれでも受験する。しかも、山のように出版されている対策本で、英語とは何の関係もない受験テクニ

ックを身につけている(キム・デギョン参照)。しゃべれない高得点者が現れても不思議ではない。

#### 4. TOEIC から TOEIC LPI へ

以上の問題は、TOEIC運営委員会がいちばんよく知っていることだ。TOEICが2006年5月の第122回公開テストから「リニューアル」されたのはそのためであろう。対策の立てやすい誤文訂正問題がなくなって、文法・語彙問題が短文穴埋め問題となり、全体的に英文が長めになった。さらに、スピーキング能力自体を測る1対1のインタビュー・テスト「TOEIC LPI」を充実させてゆくそう。現在のところまだ、TOEICテストの点数のみで英語力が認められる風潮があるが、近い将来、この面接テストがより重視されてゆくことだろう。もともとTOEIC 730点以上の英語力を持った人向けに開発され、評価は「実際に役立つスピーキング能力がない」レベル0から「高等教育を受けたネイティブスピーカー」と同等のレベル5までプラスを入れての11段階。2003年度受験者の7割は、「初級レベルの英語で対応できる」レベル1で、最高は「一般レベルの業務をこなす英語能力を持つ」レベル3(わずか0.2パーセント)。「限定的な範囲の業務では英語でやりとりができる」レベル2でさえ取得者は1割を切り、「一生の財産になる」(『TOEIC Newsletter』特別号「TOEIC LPI特集」)と宣伝されている。

ここで注目したいのは、それほど難関のレベル2の評価が、なんと「日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる」と謳っていたTOEICテストのレベルCと文面がほとんど変わらないことである。「コミュニケーションができる」と「英語でやりとりができる」は、一体どう違うのか。同じことであろう。「communication」とは、『ロングマン現代アメリカ英語辞典』によれば、“the process of speaking, writing etc., by which people exchange information” “the way people express their thoughts and feelings or share information”である。TOEICテストは「聴解力と読解力という受動的な能力を測定する」(『TOEIC LPIのご案内』)。聴きとれて読めるだけでは、「情報を交換する」ことにはならないし、当然、「自分の考えや気持ちを表現する」ことにもならない。

わが国では、英語のコミュニケーション能力を測る「モノサシ」としてTOEICが絶大な信頼を得ているが、TOEIC運営委員会が図らずも認めてしまったように、TOEICテストだけでコミュニケーション能力(=英語でやりとりできる力)を測るのは不可能である。しかも、TOEIC LPIで明らかになったのは、高専や大学が目指しているレベルCでは、おそらく「実際に役立つスピーキング能力がない」。つまり、その程度の英語力では、苦勞のわりにたいして役に立たないということだ。

#### 5. TOEIC に感わされないために

TOEIC運営委員会は、TOEIC LPIに力を入れ始めた。〈受信〉よりも〈発信〉を重視する松下電器産業では、すでにTOEIC LPIを採用している(『TOEIC Newsletter』No.93)。いずれ、産業界全体がそれに倣うだろう。周知のとおり、文部科学省の指導で、中学・高校ではコミュニケーション能力をつける授業を始めている。大学も例外ではない。

しかし、いくら英会話を教えたところで、日常生活で英語をしゃべる環境のない日本では、陸地で水泳を学ぶようなものだ。教員をすべてネイティブスピーカーか留学組に代えたとしても、彼らは、英語が毎日使われている外国で会話をマスターしたのであり、彼らに習っても、ビジネスで役に立つほどしゃべれるようにはならない。どうしてもしゃべれるようになりたいのなら、やはり留学したほうが効果的だ。国内で、それも国語や数学以上に時間をかけて、学校の教室で英会話を教えることほど時間の浪費はあるまい。

TOEICテストは、わが国の英語教育界が軽視してきたリスニングと速読に学習者の目を向けさせた点で画期的だった。しかし、試験勉強でとる400点あるいは470点は、本当に大学院や企業で必要な英語力の基礎となりうるのだろうか。

マークシート方式のTOEICテストのおかげで、コミュニケーションの有効な手段であるはずの「英語を書く力」が、現在いちばんおろそかになっている。ひと昔前までわが国では、英単語を何度も書いて綴りをしっかり覚える習慣があったのに、会話に力を入れる今日、漢字以上に書けなくなっている。学生のうちにしっかり書く練習をしておかないと、あとで困るのではないか。単語が綴れなければ、英文は

絶対に書けないのだ。

TOEICテストの改訂で、英文法がさらに軽視されることも心配だ。TOEICではたいてい必要ないのかもしれないが、英文法を知らなければ専門的な文献は読めるようにならない。会話においても簡単なやりとりはできても、それ以上は伸びないだろう。アメリカへ「生きた英語」を学びに行ったある大学生は、「こちらへ来て一番大切だと思ったものは語彙力と文法でした」と告白し、こう続けている。

高校で英語をたくさん勉強したとはいえ、『しゃべるのには文法は関係ない』といったことをいろいろなところから聞いていて、それを信じていたため、さほど力を入れて文法や語彙を増やす勉強をしていませんでした。だから、最初のころはよく『高校でもっとちゃんと勉強しておけばよかった』と後悔していました。やはり英語は文法、語彙、読解をしっかり学ばなければ、いくら生の英語を聞いていてもしゃべれるようにはなれないのです。（『文科省が英語を壊す』）

TOEICの信者はなにかと学校の英文法教育を敵視し、文法が会話の邪魔だと公言しているようだが、こうした弊害が実際に出てきているのである。茂木弘道氏は、英会話は教室向きではないとし、「一対多」向きの「文法・読解が教室での教育の中心となるということは当たり前のこと」と断言している。

筆者自身も、学校ではやはり、英文法と読解、さらに英作文の基礎を中心に教えるべきだと考える。TOEICテストはそのあとの話だ。TOEICの点を上げようと急ぐあまり、これらを軽視して、TOEICを目標に英語を教えることは本末転倒であり、ナンセンスの極みである。ビジネスに関連する無味乾燥な情報ばかりを読ませるTOEICには絶対出題されない題材、たとえば、喜怒哀楽に富んだ体験談や伝記、異文化や現代社会の諸問題を扱った評論、自然科学に関するエッセー、感動的な小説なども、学生時代にきちんと精読しておかないと、文化的背景の違う生身の人間を相手に論理的な議論など到底望めまい。

以上のように、TOEICに振り回されると、わが国の高等教育が成り立たなくなるばかりか、英語力の基礎自体が破壊されてしまう。TOEICテストを否定するつもりはない。実用英検同様、英語を学ぶ動機

づけなどに活用することはおおいに結構だし、TOEICのリスニング問題や速読術もある程度教室で教えるべきだと思う。TOEICを視野に入れるのはいいが、要は学校で教える英語がTOEIC一辺倒になってしまっただけとはいけない、ということである。たとえ世間が評価してくれなくても、TOEICテストの点数に表れない昔ながらの教育も続けていかなければならない。TOEIC470点といった目先の目標にこだわりすぎると、国際技術者などのような将来の目標がかえって遠のくことにもなりかねないのである。

〈追記〉本論完成後に、「TOEICライティングテスト」の日本導入が決まった。この決定を歓迎したい。しかし、新プログラムの登場によって、「TOEICテスト」の不完全さは証明されたと言ってよいだろう。

#### 参考文献

- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2000) 『TOEIC公式ガイド&問題集』  
 ——(2003) 『TOEIC Newsletter』 No.83  
 ——(2004) 『TOEIC Newsletter』 No.87  
 ——(2004) 『TOEIC Newsletter』 No.88  
 ——(2005) 『TOEIC Newsletter』 No.92  
 ——(2005) 『TOEIC Newsletter』 特別号  
 『TOEIC LPI 特集』  
 ——(2005) 『TOEIC LPIのご案内』  
 ——(2005) 『TOEIC Newsletter』 No.93  
 キム・デギョン (2003) 『TOEIC Test「正解」が見える』 講談社インターナショナル  
 茂木弘道 (2004) 『文科省が英語を壊す』 中央公論新社

(群馬工業高等専門学校助教授)